060　比良　010819
◎8：10 比良の坊村登山口、なんと朝の早いことかと我ながら驚き。昨夜の 10 時前頃に衣川さんから電話がかかった。日々、夕方の 4 時ころからビールを飲み始めている、クーラーの効いた部屋の中で一日じっとしている、これはいけないということで、明日空いているか？空いていれば木地山に登りたい、と一杯機嫌で連絡をいただいた。「空いているよ」「なら　4 時に起き　5 時か　5 時半　迎えに行く」と早速話は決まった。オレも朝 5 時前に起きだし朝食に弁当・水筒の用意をしていると、迎えが来た。
◎車を走らせながら、「伊藤新道はどう？」「きつい登り　2 時間強」「木地山よりはハード」なんて会話が続き、目的の山が比良の伊藤新道に変更になった。若いころはここの林道が車で自由には入れた、牛コバの林道終点まで何度も行ったことがある。何年か前の嵐のあと、崖崩れなんかがあり、以降鎖が張ってある。伊藤新道の登山口まで 30 分、牛コバまで 40 分ぐらい歩かねばならない。
◎林道途中に滝修験場が、その先に湧水が壁一面から流れ出ている。冷たくて美味い、帰りに汲んで帰ろう。
◎伊藤新道を登っている、ここは急な斜面、とはいえかろうじて二足歩行で登れるが、荷を担ぐとばてそうだ。横が 2.3 メートル幅の谷筋、大阪に居れば猛暑日で大汗をかいてるのだろうけれど、谷筋の風は涼しく天然クーラーの感あり、ゆっくりじっくり登っていく。
◎地面をなにかがゾロリ、ヒキガエル、通称ガマ君がのそり、べたり、春に見た水溜りいっぱいに広がった卵が成長したようだ。オレは知らなかったが、衣川さんが、ヤマヒルも見つけている。
◎もうすぐ登りが終わるというところで、脱力症状。体調は悪くないし、握り飯も食ったし、と思いながらハタと気付いた。「オカムラさんは　休憩の度に　何か食べているね」といつも言われていたが、たしかに何かを食べていた、今日もおにぎりを食べていたが、これだけではよくない、甘いものが不足しているのだ、とわかった。いつもザックの中には甘いパンがどっさり入っていた、「よくまあ　こんなカロリーの高い　甘いものを」と笑われていた、甘いパンはオレの登山には必要不可欠なようである。
◎小さいハエのような、アブのような虫がまいまいブーンとまとわりつく。虫よけスプレーを忘れてきた。
◎白滝山にやってきた。1022M。ちょっと雰囲気が違う、緑が多い、湿気ている、冬のここらあたりはいたくお気に入りの場所だったが、と思いつつ、「池に行こう」と歩き出した。このあたりは凸凹がある大きな台地、山の上の方にいくつかの池がある。冬の姿は一面真っ白、池も凍ったうえに雪が積もって向こうの方まで見渡せるお気に入りの所だったが、夏の姿を見ると凸凹森林地帯のようで、ここでテントを張って一日過ごそうかという雰囲気ではない、熱に浮かされたように、「あそこはいい所」と言いふらすには何段階も格下げの感がある。
◎このあたりはポコリンだだっ広い場所だけれど送電線の鉄塔があるので迷わない。地図で調べると、送電線は葛川中小学校から東南東に直登して長池の方まで来ている。長池からまた東南東に琵琶湖バレースキー場があり、そこに電気を送っているもよう。琵琶湖から上にまっすぐ、送電する方が距離が短いような気がするが、と素人ながらの何故がでた。
◎目的の長池に着いた、池のそばは湿気ていて虫が多そう、小高い丘の上に鉄塔がある、そのあたりは草木が刈られ地面も乾いている、少し早いがここで飯にしようと座り込んだ。握り飯と菜っ葉のおしたし、いつもタッパに入れてくるが水気が漏れだし袋の中が濡れている。今日はタッパを新聞して包んでみたら、新聞紙はいちように濡れているが、不快感はない、「これだね　次回からは」と発見。
◎池があるこのあたり、「テントを張れば　快適空間かな」と想像していたが、夏に入った今、草木が多く、地面がおおいに湿っている、「台高の　檜塚奥峰は　魅力的だったが・・」これもテント一泊を夢想しているが、一式担いで登る力はもうないかもね。
◎1 時前に林道まで降りてきた。ポカリを 1.5 リットル、茶を 0.5 リットル、途中で川の水を少々、全部飲み干してしまった。夏の山は水分補給が大変だ、それと甘いものは必需品だ、五日後、山田さんとの槍が控えている。
◎林道の山肌から、岩の間から水があふれ出ている、冷たくて美味い水だ、まずゴクリおおいに飲んで、2 リットルをザックに入れた。これを持ち帰ってコーヒーを飲むと美味いんだ。

061　槍-Ⅰ　090819
◎9：30 ひるがの高原で早い目の昼飯を食っている。「昼飯というよりは　朝飯の　時間じゃねえか」と文句を言うご仁もおられるかもしれないが、オレは今朝 4 時すぎに起き、朝飯を食って出発した。カツ丼がすんなり腹に収まった。6 時過ぎ、京都南ＩＣを出て竹田駅へ、ちょっと迷ったが、駅前で山田さんを発見、合流、すぐに高速道路に取って返し、一路信州に向かった。
◎「槍ヶ岳に登ろう」と去年から言っていた、春に、「槍ヶ岳に　登りましょう」と約束をしていた。一週間前に予定を組んでいた、天気予報で一日目の午後が雨になっていたので一週間順延した。やはり一日目が雨の予報、「もう一週間　順延しますか」と言っていたが翌日になって予報ががらりと変わりお陽さまマークが並んでいる。「明日決行できますか」「できるよ」ということで、5 月・6 火・7 水の決行となった。
◎新穂高温泉の登山駐車場の手前で、「満車です」とあんちゃんが赤い棒を振る。「登山なので、駐車場に入ってだめなら出てくる　かまわない？」と下の駐車場に向かった。8 月とはいえ、普段の日なのに車がぎっしり並んでいる、駐車場の中をぐるり走ると、ぽつりぽつりと空いている、「ラッキーだね」と言いながらなるべく槍に近い奥の方を探して駐車した。盆が近づくとそれこそ満杯になり、一つ上の駐車場に止めることになる。そこからは歩きとケーブルで 1 時間ぐらいのロスになる、あんちゃんにわがままを言ったのが正解だった。
◎12：00 歩き始めた。登山届を投函、ロープウエイを横に見て歩く、夏の暑さ、荷の重さ、それでも信州だ。槍ヶ岳は今まで何回登ったか忘れてしまったが、正月にも、ＧＷにも、夏にも登っている。若いころは上高地から入っていたが、60 歳代は今回の槍平が多かった、雪の中を何とか冬季避難小屋にたどり着き寝かせてもらった。
◎歩き始めてぐるり回ったところに小屋がある、正式名称は“穂高平小屋”というのかと改めて再認識だがすぐまた忘れてしまうかな。何度もここで休憩した、泊まったことも 2 回、大きな木をくりぬいた風呂を覚えている。大きな樹も健在だ、今日は横の牧場に牛はいなかった。山が見えだした、笠ヶ岳がチラリ見える。それとも双六岳かな。
◎白出沢までやってきた。ここまでは林道、ここからが登山道だが、いささか涼しい風が感じられる。新穂高温泉の駐車場はまだまだ大阪と変わらない暑さだったが、そんな暑さから少し解放されてきた。小川の流れを汲んで飲む、冷たくて美味い、雪解け水だからだろうねこの冷たさは。8 月の初旬、まだまだ雪が残っている、向いの笠ヶ岳には幾本も雪の谷、蒲田川:右俣谷にも大きな氷の塊が残っていた。
◎ヒ～ヒ～ハ～ハ～行けども歩けども道が続く、岩ゴロゴロの道、荷が重い。若いころには新穂高温泉から槍平までなんとも思わず歩いていた、苦痛も疲労も感じたことが無い。仲間で遅くなってバテテいる方々を見て、「なんでそんなにしんどいの」ぐらいにしか思ってなかった、そんな道だった。槍に登るための前座の道ぐらいにしか思ってなかった。あらためて昭文社の地図でコースタイムを調べると、登りは 4 時間半、下りは 3 時間半になっている。それが今回登りに 6 時間、下りに 5 時間もかかってしまった。しかもテント泊の荷が重く、槍にピストンで登る体力より、前座の道の方が疲労困憊、おおいに悲鳴と始末であった。
◎滝谷の渡渉、気にもとめたことが無かったが、雨が降り水嵩が増せば事故につながると、大雨にも警戒した。登りの日には、沢の流れがごうごうと、水の顔を見ておそるおそる歩を進めた。下りは多少水嵩が減っていた。そばの避難小屋の裏に流れ出る湧水は、往路も復路も美味しくいただいた。
◎もうすぐ槍平の小屋が近づいてきたかな、空が曇って薄暗く今にも降りそうな雰囲気。2.3 回ポツリ、水滴が顔にかかったが、それでも今日は降らないんじゃないのかなという、これまたオレなりの予想。大阪ならまだまだ空が明るい時間、蒸し暑く 30 度越えに喘いでいるような状態かな。このあたり、2000Ｍを越えているのか、風が涼しくすがすがしいが、長そでのシャツは汗に濡れて今にもしずくが滴りそうである。
◎テント場に着いたのが夕方の 6 時、疲れ果て、ばてばてである。空は暗く雷の遠吠えがゴロゴロ聞こえる。冬のここは一面真っ白で赤く塗られた小屋が大きく見えたが、夏の今、樹も草も緑を旺盛にはびこらせ、小屋も川もぼやけて見える。歩きながら小屋を見失い、別の方向に行ってしまい、照れ笑いで小屋を探した。受付で二人分 2000 円を払い、横のテント場に向かった。

062　槍-Ⅱ　100819
◎テント場には5張ぐらいのテントしかない、新穂高温泉駐車場の込み具合を考えれば、皆さんどこに散らばったのだろう、昔からこの槍平はあまり人の多くないところのようだ。水場の冷たい水をたっぷり飲み、濡れたシャツを着替え、テントを張った。晩飯はスーパーマーケットで買った焼き魚弁当、400円也。弁当を食い、少しウイスキーを飲み、疲れた身体を、ぼおっとした頭をほぐしていた。薄暗く曇っているが、上の方は見える、ギザギザに刻まれ尖った穂高の山々を見ると、アルプス一万尺が感じられる。岩稜が夕日にほんのり赤く、空の上にあるようなギザギザに刻まれ尖った岩肌を、穂高連峰を見ている。
◎朝5：30　昨夜は7時すぎに寝て途中目覚めることもなくぐっすり朝まで寝いってしまった。寝ぼけまなこで明るくなっていく空は、「お　晴れてきた」と感じる空模様、「登れるぞ　登るぞ」とうれしさを噛み殺し冷たい水を飲みほした。朝食はヤカンいっぱいに紅茶を沸かしたくさん買ってきたパンを食べる。
◎6:00出発。ここのテン場のみなさんはテントをたたみ大きな荷を背負って、槍に向かって歩いて行く。小屋からも何人かの方々が槍に向かって歩いて行く。我々は槍からまたここに戻ってくる予定。
◎1時間ほど登ると、「最終水場」と書かれた谷筋の流れがある。昨日の疲れが残っているのか足どりは重い。テント場で休んでいた50歳代の男性にまた会った。金沢から新穂高温泉まで車で来て、槍ピストンで今日中に新穂高温泉に帰るという。「それはすごい」と驚いたが、そんな方法もあったのかと感心した。若いころの健脚なら、荷がないピストンならそれも可能かと考えてしまった。
◎樹林帯が終わりいよいよアルプスを歩いているという雰囲気になってきた。横の大斜面、1000Ｍも続くかという大斜面、緑の草が、大きな岩が、白い石ころが、「槍にやってきた」と感じさせる。9時ころになってくると、陽が照り始め、熱気も感じるが涼しい風もそろり吹いてくる。
◎30分ピッチで登っている、25分歩いて5分休憩、25分までまだ10分あるというあたりから、いささかしんどい、ヒ～ヒ～ハ～ハ～である。昨日の疲れが残っているのか、槍はしんどいものなのか、ヒ～ヒ～ハ～ハ～である。このしんどさは若いころ重い荷を背負って以来かなと苦笑、ジジイになったものである。山はきれい、前を見ると槍の岩稜が、緑の斜面が、後ろを見るとでっかい笠ヶ岳、雪の谷筋が4.5本、もうアルプス満喫である。笠ヶ岳、昔大雪崩に出会った斜面はどれだったかな、上の小屋は見えない。あそこにも2.3回は行ったことがある。笠の向こうには雲海がポコポコ、その向こうに見える山は何かねえ、白山かねえ。海は見えないねえ。
◎鏡平の小屋が下の方に見える、新穂高温泉から鏡平、双六を経て三俣蓮華、何度か行ったねえ。澤山さんが亡くなる1年前が最後だったか、彼はもう体力が弱っていいた、鏡平の小屋で休ませてもらって寝ていた。それでも行くというので、双六のテント場まで歩いた。彼は若いころから、足がつる、胃がむかつく、食べられない、などとよく言っていたが、ギブアップはしない人だった。
◎10：30乗越までやってきた、もうそこが目的の槍だ、簡単に登れた、「しんどい　しんどい」の連発だったが、ポツリポツリ登ってくる人たちのほとんどが、「しんどい　しんどい」「ああ　きつい」「もうだめ」と皆さんやはりその言葉の連発だった。周りを見渡すと、我々が一番の年長者のようだ。
◎食堂に入ってカレーライスを注文した。1200円也、味はまずい。オレの作るカレーの方がよほど美味い。大阪では700円で買えるウイスキーが3700円もしている、若いころならあれを買って夜の酒盛りをしていたのかも。昨日の、ひるがの高原ＳＡでのカツ丼以来のまともな食事、まずいなんて言ってはいけませんぞ。
◎この季節、花がたくさん咲いている、高山植物のお花畑、白・黄・紫・・と。「何が　お花畑だ　オレのアトリエの方が　もっときれいぞ」というセリフはもう言わないが・・。槍の穂先にはたくさんの人が群れている、交通整理でもしなければというぐらいのたくさんの人が、それこそお花畑の色と同じようないろいろな服の色、ゆっくり動いている。大きな声では言えないが、オレはあそこには登ったことが無い、あそこはオレの行くところではない、と悦にすましている。実は恐いのである。
◎先ほどの金沢の人が、カレーライスの席でも向かい合わせになった。白山の話が弾み、「砂防新道の避難小屋はきれいですよ　勧めますよ」という話、槍のてっぺんでもう次の山の話である。

063　槍-Ⅲ　110819
◎12：15 いよいよ槍を下山。たどり着いた時点では、立っているのもふらふらという状態だったが、カレーライスパワーかな、元気に一歩づつ下り始めた。花がきれいだと思うのだが今日は景色を撮るぞとカメラを向けている。まだ正午だというのに雲が湧き出してきた、青空がどんどん雲に占領されて来ている。昨日も今にも降りそうな空模様の夕方だったけれど、ポツリ水滴が当たっただけだった。今日はどうかな。
◎登ってくる方々が、「もう　ぎぶあっぷ」「もう　つかれた」「もう　だめだ」と口々におっしゃる。「我々だけじゃなかったのだ、皆さん我々よりも　若いですぞ」下りは快適だ、慎重にゆっくり、歩く。
◎下り始めて、一本目の休憩、青空が少し残っている、30%ぐらいかな、まだ昼過ぎなのに雲がわいてきた。
◎3 時前、テントが見えてきた。無事、槍ヶ岳に登れた、気分は最高である。天気はまったくの曇り空なり。
◎5 時。先ほどまでかろうじて見えていた穂高連峰のギザギザ岩稜が霧の中に隠れ、テント場のまわりの小山、樹々に白い霧が見え隠れという幽玄の世界、遠くでゴロゴロという音が聞こえる。昨日と同様の天気、これが夏の山の天気なんだ。今にも降りそうだが、今日も降らないかな。
◎今回の山の食事は、粗食である。昨夜は焼き魚弁当、今日は乾燥ワカメを入れたラーメン、アルファー米と温めたカレーパック、ウイスキーを少し飲んだ。昼の行動食もパンばかりをかじっていた。
◎朝 4：30 起きだした。前日はまったく目覚めもなかったが、今日は 2.3 度目覚め、すぐにまた寝込んでしまった、それでもよく眠れた。昨日飯を食い終わったころから 1 時間ほど小雨が降った、テントの中へ退避していた。
◎朝飯はヤカンいっぱいに山田さん持参の紅茶、それと残っているパンをほおばった。テントもフライも夜露に濡れている、少し乾かしたが朝の静けさでは一向に乾いてこない。パッキングが終わり 6 時にテント場に別れを告げた。テント場は一人 1000 円である。水は蛇口からどんどん流れ豊富である。2.3 度お世話になった冬季避難小屋も健在だ。もう少し背が高いと思っていたが、2 階の入口が意外と低いことを発見。
◎9 時前、もう少しで岩ゴロゴロの道が終わり林道に出るだろう。行きも帰りもこのゴロゴロ道が一番の難関だったと今さらながらに驚いた。若いころは何とも思わず歩いていた、それこそトントントンと足を運び、右へ左へ飛ぶように一歩一歩を進めていたのだろう。ジジイになってくると、バランスの悪さ、足の運び、高低差が怖い、などの悪条件が重なり時間ばかりがかかってしまう。荷が重いのも悪条件だろう。右下を流れる蒲田川、ごうごうと水が流れる。白い大きな岩に夏の日が照り輝き今日も暑くなりそうだと思わせる予感、今はまだ長袖シャツを着て歩いているが、駐車場に着くころには夏の日の照り返しが予想される。
◎フ～フ～いいながら、白出沢に到着。3 時間もかかってしまったと苦笑するしかない、これがジジイの実力なんだと苦笑。
◎白出沢を出て、奥穂への分岐があり、その先に川が流れてきている。その水を汲んでおおいに飲んだ、冷たくて美味い。しばらく歩くと、思い出の場所、緊急避難テントの場所がある、ちょっとその話を。
◎5 年ぐらい前、澤山さんと二人、車でアカンダナ駐車場→シャトルバスで上高地→前穂登山道で岳沢（だてさわ）小屋でテント。そこで澤山さんの杉並高校の仲間たちと会う。翌日はみなさんと別れ→紀美子平→前穂高岳→奥穂高岳→奥穂高山荘で泊まろいという計画だったが、盆に近い季節、人ヒトヒトにうんざりして、「くだろう」と澤山さんの一言で白出沢まで下っていった。バテバテで白出沢に、少し先でテントを張って寝た。
◎11：00 駐車場に到着。槍平までの行きが 6 時間、帰りが 5 時間もかかっている。コースタイムでは、行きが 4 時間半、帰りが 3 時間となっているが、このコースタイムはちょっとおかしいんじゃないですか、なんてぼやき。
◎靴を履き替え、「さあ　風呂へ」「次は　飯」「バスターミナルに行きましょう」と出発したのはいいが、別の道を突っ走ってしまった、バスターミナルの道は違っていた、ナビを入れるべきだったと後悔。「風呂　入らなくてもいいよ　帰ってシャワーするから」「それじゃ　京都からの電車　まわりの人が　嫌がるのでは」などと笑いながら、ガソリンスタンドの手前の中華屋でソバ、次にガソリンを入れ、道の駅でトマトを買い、高速道路に乗った。いつも飯を食った後、眠気が襲ってくるのだけれど、ソバだけでは腹がいっぱいにならないぶん、風呂に入らないぶん、眠気がやってこなかった。まだ日の明るい時間に竹田駅で山田さんと別れ、無事家に帰った。

064　今昔物語　150819

蜂と水銀商＜巻29第36話＞

◎あらすじ：京に大きな水銀商がありました。多年せっせと商売に励みましたので、富み栄え、財産も多く豊かな暮らしをしておりました。この水銀商は前から京都と伊勢の国の間をしょっちゅう往来していましたが、その際は、馬百余頭に多量の絹・布・糸・綿・米などを背負わせ、その番人としては、いつも少年数人を使って馬を追わせていくだけでした。彼もだんだん年老いてきましたが、いまだ賊に襲われたことがありません。

◎水銀の産地の伊勢の国は、親子の間でも物を奪いあい、親疎、貴賤の区別なく相手のすきをうかがい、騙しあい、というひどい土地柄でした。どうしてこの水銀商だけが無事なのか、不思議なことでした。

◎当時山賊の集団八十余人、鈴鹿山にたむろし、行き来の旅人を襲い、財物を奪い、皆殺しにするなど悪逆の限り働いていた。折も折、水銀商が伊勢の国から馬百余頭に様々な財宝を背負わせ、京へと上がってきました。「なんと馬鹿もんだろう」と山賊等は鈴鹿山中で待ち伏せ、財宝を奪った。少年らは逃げ、女たちは着物を剥がれた。

◎水銀商は牝馬に乗って小高い丘の上に逃げ登った。一時間ばかりして三寸ばかりある蜂が舞い降り、続いて幅二丈（6M）ぐらいの赤い雲があらわれ、山賊どもに襲いかかった。赤い雲に見えたのは蜂の大群だったのです。山賊は一人残らず刺殺された。水銀商は盗まれた財宝と、山賊の財宝を持ち帰り益々栄えた。

◎実は水銀商、家で多量の酒を造り、もっぱら蜂に飲ませ、大事に飼っていたのです。それゆえ他の盗賊たちはこの人の物は盗ろうとしなかった。

◎蜂さえ恩というものを知っている。心ある人は、恩を受けたならば、必ず恩返しをしなければならない。また大きな蜂を見かけたら、決して打ち殺してはいけません。多数の仲間を連れて、必ず恨みを返すから。

◎先日来の“山の民”の話から、水銀の話は、ピンときた。当時丹生鉱山:三重県多気郡が有名とは初めて知った…縄文時代から採掘されていたらしい。半世紀前まで残っていた水銀鉱山へ潜った画家が、「真っ赤っか」と称賛していた話が目に浮かぶ。文中で伊勢の国の人々をかくまで侮蔑する風潮はいかがなのもか、都の人間の想いあがりか、そういう時代だったのか。それと蜂が酒を好きだとは当時の人々の昆虫に対する認識が面白い。

葦苅＜巻30第5話＞

●あしからじと　思ひてこそは　別れしか　などか難波の　浦にしもすむ

お互いがこれ以上悪くなるまい、幸せをつかもうと別れたのに、なぜあなたは、難波の浦で葦を刈って暮らしているの。落ちぶれはてた元夫に対する歌。

●君なくて　あしかりけりと　思ふには　いとど難波の　浦ぞ住み憂き

あなたと別れたあとは、葦を刈るような境遇に落ち込み、別れたのが失敗だったと思うにつけ、難波の浦がいっそう住みにくくなります。夫婦はまだまだ上流階級の下ぐらいだったのでは。今は農夫に落ちぶれている。

◎京の町に、貧しく、取り柄もない若者がいました。知人もなく、父母や親類もなく、自分の家もなく、人の所で使われていました。少しも芽が出ず、もしやほかによい所でもあろうかと、あちこちに身を寄せてみましたが、どこへ行っても変わりばえなく、とうとう宮仕えもできず、どうしようもなくなってしまいました。

◎妻は若く美人で、心優しい雅な人柄なので、この貧しい夫に従い苦しみにたえ暮らしていました。夫が妻に「この世にある限りそなたと二人でもろともにと思っていたが　日ごとますます貧しくなる　一緒に居るのが悪いのではないだろうか　別れてみようか　それぞれ運を試してみよう」妻は夫に、「けっしてそうは思いません　飢え死ぬまでもろともにと思っておりました　あなた一人なら　いいこともあるとお考えなら　別れることもいたしかたありません」お互い泣く泣く別れた。

◎妻は働き、めをかけられ、のちには国守夫人におさまった。夫はいよいよ落ちぶれ、摂津の片田舎まで流れ、農夫になり下がった。妻であった国守夫人がたまたま夫を見つけ、再会するわけである。国守夫人は、男を呼ばせ酒と食事と与える。男は泥に汚れたまま、がつがつ食べる。国守夫人は男に和歌を忍ばせ着物を下げ渡す。

065　九相図　180819
赤坂憲雄著＜性食考＞
◎前回はこの本の“はじめに”の話を載せた。中身を読み進むうちに、「これは難しい」「食べること　交わること　大事なのは　このふたつだけなのかな」と迷ってしまった。食を主にしても、性を主にしても、その相棒はいくつかのことが考えられる、「このふたつだけが　絶対テーマとは　思えない」というふうに本を読みながら先生の意見に逆らってしまった。ところが“九相図（くそうず）”という言葉にオレの琴線がふれた。先生はこの九相図の専門家である、山本聡美先生の論によって文章を展開されている。

◎死体農場＜body farm＞以前、何の気なしにこの本を借りてきた、中身を読んで驚いた、「さすがアメリカ」なんて思った。本物の人間の遺体をいろんな条件の場所に放置して経過観察する作業をしている施設の紹介。犯罪捜査のためと書かれていた。たまたま最近興味のあった話、菌類の話、山や森の清掃の担い手、死体農場とは、これの動物版、人間版なのだ。人間が死んだ、どうやって死んだ、どれぐらいの時間が経過したらどうなる、どんな凶器で、・・それこそ幾多の条件が出てくる、それを調べるために善意の献体も含め、たくさんの遺体が並べられている。死体農場ではそれぞれの専門家がそれぞれのテーマで調べているとか。

◎相変わらず、先生の文章展開は出だしからなかなか面白い、とここから先生。もし許されるならば、あなたは誰から、どんな講義を受けてみたいですか。そんな問いかけがなされるなら、わたしはきっと迷わずに、「宮沢賢治の性教育講座」と答えるだろう。宮沢賢治は弟子たちに、浮世絵の春画をテキストに性教育をおこなっていた、という話がひそかに語り継がれてきた。＜略＞しかしわたしはふと、もしそれが春画ではなく、いわゆる九相図であったならならば、とさらに想像をたくましくする。

◎九相図（くそうず）：死体が腐敗し白骨になるまでのプロセスを九つの相で表す東洋的な絵画である。山本聡美＜九相図を読む＞＜死体の変化を九段階に分けて観想、イメージトレーニングすることによって、自他の肉体への執着を減却する。＞＜仏教の修行の一つに不浄観がある。出家者が自他の肉体に対する執着を断ち切るために腐敗死体を観察する。その不浄観によって、色欲・形容欲‥が除かれる。＞＜どんなに美しい容姿も汚物の上を仮の姿で覆い隠しているようなものであると知り、淫欲を防ぐことができる。＞

◎古事記のイザナキによる黄泉の国訪問譚を想起しておきたい。イザナキは亡くなったイザナミ恋しさに、黄泉の国を訪ねるが、そこで、「うじたかれこころきて」いるイザナミの姿を見て、驚き逃走を図る。山本聡美＜死後の肉体の不浄な様を見て男神が女神への執着を捨てるという物語構造は、仏典を通じた不浄観の思想と結びつくことで、中世には九相観説話へと展開する。生と死・聖と俗。美と醜・男と女・浄と不浄・永遠と無常・罪と救済、などが交歓を果たす物語の森の源流に古事記が見いだされるということか。

◎山本聡美：伝統的に、日本の九相図には女性の死体が描かれてきた。九相観を行う主体である男性出家者にとって、性的煩悩の対象は主として女性である。＜略＞高貴な、あるいは美しい女性の肉体が、徐々に腐敗し醜悪な姿に変化していくからこそ、九相図は煩悩を退ける図像として力を発揮したのであろう。さらによく見ると、描かれた女性たちの死体は大層なまめかしく魅力的でもある。＜略＞九相図は女性のあられもない姿を、臆面もなく眺めることができる格好の主題でもあった。＜略＞男から女への、複雑なまなざしの先に横たわっている。

◎山本聡美：九相観説話の中の女性たちは、自らの強い意思と自己犠牲の精神によって不浄の肉体を晒し、他者の発心を助けたものとして尊ばれてもいる。死体を晒すことが、女性にとっての信仰心の表明であるとみなされる土壌であった。

066　古事記　250819

　前回の九相図の話、遺体、死体の話から、古事記のイザナミ・イザナキの話が気になったので、現代文訳のその部分を読んでいる。古事記にしろ、今昔物語にしろ、現代文訳でないとなかなか読み進まない。古典文学を読みこなす教養の無さを痛感。そのてん、現代文訳に、丁寧な解説、どこが面白い、ここがポイントだ、この時代はこういうことだったんですよ、なんていうような話が載っていれば一番いい。これに、歌や漢詩が盛り込まれていると、もうひとつ難解になってくる。今昔物語も現代文に訳してあると、話の二つ三つは読み進められるのだけれど、原文に近いままだと話ひとつも進まない、なにが書いてあるのか、なにが面白いのか、なにが言いたいのか、というふうに頭の中にすんなり入ってこない。これが学生時代、古文を勉強しなかったむくいかな。

◎天と地（あめとつち）がはじめて姿を見せた。その時神々が住む天空の上の高天の原（たかまのはら）には、アメノミナカヌシ・タカミムスヒ・カムムスヒという三柱の神が成り出た。やわらかな土が脂やクラゲのように漂う。男と女のきざしをもつ神々の果て、イザナキとイザナミが成り出た。イザナキとイザナミに向かって、高天の原にいます神々が、「漂っている地（くに）を　修め　まとめなさい」と仰せになり、天の沼矛（あめのぬぼこ）をお授けになった。
◎イザナキとイザナミは沼矛をさし下ろし、流れただよう海をぐるぐるかき回して引き上げると、立派な矛の先からしたたり落ちた塩が重なり積もり積もってできた、淤能碁呂島（おのころしま）降り立った。
イザナキ、「お前の体は　どのようにできているか」
イザナミ、「私の体は　成り成りして　成り合わないところが　ひとところあります」
イザナキ、「わが身は　成り成りして　成り余っているところがひとところある　そこで　このわが身の成り余っているところを　お前の　成り合わないところに刺しふさいで　国土（くにつち）を生もうと思うのだが　どうだろうか」
イザナミ、「それは　とても楽しそう」
イザナキ、「それならば　わたしとお前は　この天の御柱のまわりをめぐり　出逢ったところで交わりをなそう」

◎女が先に声をかけるのはよくないと思いながらも先に声をかけ、そのまま秘め処（ひめど陰部）を結び合わせた。骨なしの水蛭子が生まれたので流し、淡島を生むが、子の数には含まない。思い通りに行かないので天つ神に尋ねると、女が先に誘いをかけたのがよくないという。今度は男が先に声をかけて結び合うと、淡路島を生む。次に四国、九州、隠岐の島、壱岐の島、対馬、佐渡島、本州（おおやまととよあきずしま大倭豊秋津島）を生んだ。そのあとも次々と島を生み、続いて神々を生んだ。

◎イザナミは、火の神ヒノカグツチを生んだため、み秀処（ほと女陰）を焼かれ病み臥せりおおいに苦しみ亡くなった。イザナキは悲しみ、「いとしい我が　妹のいのちを　子ひとりととりかえてしまうとは」と嘆き、イザナミは比婆の山に葬られた。イザナキは、子の火の神の首を斬ると、岩石をも裂く剣の神などが生まれた。
◎その後、イザナキは、イザナミを一目見ようと、黄泉の国へと追いかけていった。黄泉の国にある御殿の戸を開けて外に出て迎えたイザナミに向かい合うと、声をかけた。「さあ　帰ろうではないか」「うれしいことでございます　わたしも帰りたい　黄泉の国を支配する神に話します　その間　わたしを見ないでください」
◎待ちきれなくなったイザナキは、御殿に入った。火に浮かび上がったイザナミの体には、蛆が這い回り，雷（いかづち）どもがわきだしうごめいていた。それを見たイザナキは恐ろしくなり逃げ出した。イザナミは「私に恥をかかせましたね」強く怖い女に追わせた。追いつおわれつ、ついにイザナミ自身が追いかけてきた。イザナミは怒りに震え、「あなたの国の人草を　一日千人ずつ絞（くび）り殺しますよ」イザナキは、「わたしは　一日千五百の産屋を建てようぞ」そのため人々の棲む地上では、一日必ず千人が死に、一日必ず千五百人の人が生まれることになった。

067　ぼやき　290819

魂の開放、なんと大袈裟な、なんとえらそうな、と半分照れながらも、これはいい言葉だと悦にいっている。「魂の開放　そうだ開放だ　自分自身から離れ　ぼおっとして　これが素晴らしいんじゃないか」とつぶやいている。開放と離脱、これは違う、開放は無になっていくのだが、離脱はゼロになっていく。無って、在るものがあって、それが無くなっていく、あるものとはほんとは存在している。存在はしているんだけれど、その存在が存在で無くなっていく。それに反して離脱は、一つ一つの存在が離れていく、そう離れていくんだよ。そこに在るっていうことと、離れていくということは違うんだよ。そう、なんでもかんでも、在ることは大事なんだ。

毎日毎日河原へ行っている、そこでは人も少ない、人のいないことの方が多い、人がいても、「見たことのあるおっさんかな」とか、「よくまあ　こんな汚い川の　魚　釣って　食いもせんのに　ご苦労さんな　太公望」と釣り人の背中を見て走る。河原に居る1時間半ぐらいの間、話すことも笑うこともない。魂の開放というが、ここへくれば、オレは引きずっているいろいろなものを一つずつ脱ぎ去り、考えることもなく、想うこともなく、下を見て、前を眺めて、足を動かしている。これはいいよ、考えなきゃいけないこと、想わなければいけないことが、ひとつずつ飛んでいく、電気信号を送る神経も、あちらだこちらだと振り分ける、振り分け物質も、ちょっと休憩、身体も心もちょっと休憩はいいねえ。

そうそう、登山もそうだね、一人で登る時も、どなたかと一緒するときも、はなしたり笑ったりはするが、やはり地面を見つめている、前方の土やら岩やら樹やらを見ている、ただそれだけ、ただそれだけが気持ちいい、楽しい、素晴らしい時なのである。空は見ないねえ、後ろを向いて立ち止まる時とか、天気はどうかなと見上げるが、空は見つめないねえ。オレだけのことかもしれないが、空にあまり目がいかない、それは夜もそうだね、夜空だ、満天の星だ、とみなさん騒いでいても、オレは下を向いて酒を飲んでいたか、寝ていたか、つまらんやつだね、と思われていたかもしれないね、こんなすごい空のことが興味ないなんて。

8月も下旬になってきた。なんと、大阪は熱帯夜が30日以上続いたとか、日々、窓を開け扇風機をかけそれでも夜中に目が覚めべっとり汗をかいているのを発見、いやあ暑い夏だった。それがなんと、秋雨前線がやってきて、この二日ほど、寝ていて朝方寒いと思った。

70歳を越えると、いわゆる晩年かな、俗世間のごちゃごちゃは嫌なもんだけれど、そんなものもほとんどなくなってきた。人間、衣食住が足りて、次に、金と名誉と地位を求めて、努力をしないといけないよ、なんてことも昔の話になりつつある。ところで年金というやつ、これはありがたいね、オレの場合、月にたった4万円だけど、今のところこれだけいただければなんとか食っていける、なんて笑い話だ。

オレのまわりに鬱病の人が多い。鬱病なんて、「なんだそれ　なまけたいだけじゃないのか　しっかりせんか」という世代に育って、まったく知らなかった。鬱病の人は、鬱の周期に入ると、人と話しふれたくない、やる気が無くなる、ぼ～っとしていたい、一日じゅう蒲団の中にくるまっていたい、まして進んで新しい人と会いたくもない、というようなことがのしかかってくるらしい。

オレは、最近酒を飲まなくなった、欲しくなくなった。「へええ　飲み介の　岡村が」と揶揄されそうだが・・。飲んでいた当時、酒を飲むのが好きだった、家で一人で、アトリエで飲んでいた。酒の誘いがあると喜んで飛んで行った。3時間でも4時間でも飲んでいた、笑って話していた、時間がすぐに経った、さぞかしつまらない内容を話し、くだらないことで笑っていたのだろうと、今なら想像できる。

酒を飲む時間が無くなって、酒を飲みながら過ごす相手が無くなって、人と話す機会も無くなった。これでもまだ家族がいるので、一言二言の会話はあるが、おっさんひとりのやもめジジイは、寂しかろうね。